私の会長時代を振り返って

松井　大悟
元 一般社団法人
日本非開削技術協会会長

平成13年，下水道新技術推進機構・専務理事の時に，当時の遠山日本非開削技術協会（JSTT）会長から勧められ，個人正会員となりました。平成14年の総会・理事会で会長に選任され，平成25年の安中会長の就任まで，11年間会長を務めさせていただきました。この間，交流出来ました多くの会員の方に感謝を申し上げます。

平成14年にはコペンハーゲンの世界非開削技術協会（ISTT）総会で，理事に就任しました。当時の理事会メンバーは米，英，独，豪，スカンジナビア，そして日本でした。アジアは日本だけで，アジアにおける非開削技術の普及の先頭に立てという圧力を感じたものです。理事を2期6年間勤め，この間できるだけアジア諸国との交流を促進しました。特に中国と韓国をISTTの会員にすることに努力しました。中国は北京，上海，広州の内部の覇権争いがあり大変でしたが，会員となりました。ですが，韓国はまだ実現しておりません。アジアの会員は現在，日本，中国，香港，台湾，シンガポールですが，今後は韓国をはじめ，マレーシア，タイ，インドネシア，ベトナム，元会員だったインド等，多くの国との交流の可能性があると思いますので，よろしくお願いします。

1．JSTTの財政再建

平成13年度はJSTTにとって大変な年でした。決算での収入が4400万円，支出が5700万円と，JSTT史上最大の赤字1300万円を計上しました。JSTTは平成元年に民間の任意団体として発足しました。主財源は会員からの会費ですが，大阪で開催したISTTの総会・展示会が盛況のうちに終了し，大幅な黒字となり，それを正味財産に繰り入れることによって，安定した財政基盤を持って出発しました。当時の正味財産は3500万円でした。しかし平成に入り，日本経済はいわゆる暗黒の20年，デフレ時代に突入します。JSTTも会員の減少に見舞われ，収入が減少しました。私が就任する前年の13年度の正味財産はわずか700万でした。この値は今でもJSTT史上最少です。

このために私が取り組んだのは，民間の方には常識だと思いますが，人員，経費の削減，新規事業の発掘でした。当時常勤していた事務員に退職してもらい，英語が堪能な派遣職員に変えました。低家賃の事務所への移転も含め，経費の削減に努力していただいた当時の和田，野尻事務局長には本当に感謝しています。

新規事業として，現在の収入の25％を占めている工法ナビゲーション事業を立ち上げました。また，JSTT会員の海外事業の支援をはじめ，講演会での展示広告，立ち上げたホームページでの広告掲載も行いました。私の会長時代最後である平成25年度の正味財産は1600万円で，少しは増やすことができました。

しかし，このことが私のJSTT経営のトラウマとなってしまいました。経営方法は消極的で，積極的なことができず，特に，世界の会員から希望されたISTTの総会・展示会を東京で行うことができませんでした。ISTTの理事となって以来，多くの友人から「次の総会は東京だね。その時は一票入れる」などとよく言われたものです。理事国の義務でもあったため，つらい時代でした。

2. 幻のISTT東京　総会・展示会

それでも，ISTT 東京総会の開催には2回挑戦しました。平成23年には，東京ビッグサイトで単独で。そして平成25年には，日本下水道協会と共催し，理事会を図りました。いずれも最大限見込める収入については，5万円の参加費で500人，展示参加企業は50社を予定し，一コマ40万円で見込んで4500万円。その一方で，支出は6500万円かかり，結果，赤字は2000万円という計算でした。

もし当時，正味財産が3000万円あれば，多分私は決心し，踏み切って開催したと思います。または，開催都市の援助があれば可能だったかもしれません。しかし当時は2～300万円くらいの援助だったと思います。諸外国が国際会議を開催する際，特に展示会は補助制度が充実しています。確かドイツの場合，費用の三分の一程度は補助が見込めるということでした。日本の技術を世界に売り込むためにも，国や東京都にこの制度があればと残念でした。

非開削の分野は日本，世界で必要な技術であり，その将来性は高いと判断しています。そのため，まず組織の維持を確実に行い，将来の飛躍に備えることに徹底しました。その一つがJSTTの法人化です。

3. JSTTの法人化

JSTTは平成21年4月1日，一般社団法人として法人になるまでは民間の任意団体でした。いわゆる同窓会と同じでした。周りの人から「よく法人格がないのに，日本非開削技術協会の名で電話番号や銀行口座を持てましたね」と言われましたが，設立当時はこれらのことにあまり厳しい審査基準がなかったとしか言えません。任意団体として会員規約を設け，理事会総会により予算決算を承認し，定期的に協会誌を発行し，書籍を販売し，ホームページも開いていたのですから，社会的には法人活動をしていると思われていたと思います。

私が一番心配していたのは，法人格のない組織が世界非開削技術協会の日本を代表する会員として正当性があるのかということでした（ISTTにおいては，一国の代表は一つだけでした）。法人格を持つ組織がISTTに「日本を代表するのは私です」と名乗りを上げた時にどうなるのか不安でした。このためにも，「日本において非開削技術の普及を促進している唯一の組織である」と常に主張し，それを世界にも認められる必然がありました。なにしろ，JSTT の遠山会長はISTTの会長となり，世界の非開削協会のトップとなられたのですから。また将来，東京でJSTTの展示会を行う場合，国や東京都から法人格のないところに補助金が出るのかどうかも心配でした。

平成18年，一般社団法人に関する法律が制定され，平成20年12月に施行されたことは非常に良い機会でした。早速，必要な書類を整え，平成21年4月1日に一般社団法人として出発することができました。これはつまり，我々の実績が評価されたということですが，新たに設立するという目的を社会的に公約したことにもなるため，情報の公開も合わせ，今後も努力が求められることとなりました。

4. ISTT　総会・展示会への参加

各年，総会・展示会を希望開催国の中から理事会・総会で決定します。日本も平成元年に大阪市で開催しています。開催希望国は多く，世界の中で均等に振り分けられます。私は平成13年のプラハに初参加し，以降も毎年参加してきました。その後毎年，コペンハーゲン，ラスベガス，ハンブルグ，ロッテルダム，ブリスベン，ローマ，モスクワ，トロント，シンガポール，ベルリンと出席し，不参加はサンパウロだけでした。

この中で記憶に残る総会はプラハとラスベガスです。いずれも，中東に絡む国際紛争に巻き込まれたのです。

プラハの総会は平成13年9月，音楽の国チェコにふさわしく，スメタナやドヴォルザークの室内四重奏の演奏ではじまりました。日本からは約40名の会員が参加しました。会議のハイライトは，開会式における遠山会長の基調演説「マイクロトンネリングと月面探査」でのISTT会長の引退宣言でした。会長は基調演説の中で，1989年のJSTTの創立と会長就任，1995年の英国ブライトンにおける会議への出席，その後の国際的な協力による，非開削技術の日本における発展の経過を説明されました。突然の引退宣言に日本人はもちろん，全参加者が驚き，講演終了後には多くの人が

会長の元に集まり，感謝の言葉を述べられていました。

もう一つのハイライトは，同年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロ事件でした。11日の午後3時ごろ，日本から団員の携帯電話に「アメリカの一番高い建物が爆破された」という情報が入りました。夕方6時ごろホテルに戻り，衛星放送TVを入れたところ，その画面に圧倒されました。こんなことが本当に起こっているという実感が得られず，大規模な映画を見ているようでした。いずれにしても大変なことが起こったと思いました。アメリカの全飛行場が閉鎖されたために飛行機のやりくりがつかず，日本まで帰れるかという不安が募りました。

総会の日の夜は，プラハの古いレストランで晩餐会が行われましたが，当初予定されたクラシック演奏，民族舞踏は急きょ取り止めとなり，総会議長の北米協会の会員，アメリカ国民および犠牲者に対するお悔やみの言葉にはじまり，全員で黙祷をささげました。

当時幸いなことにロンドンのヒースロー空港は閉鎖されておらず，便の時間は不定なものの運行されていたため，なんとかヒースローまで行くことができました。米国に比して西欧の空港はオープンしているところが多く，これが幸いしました。米国と欧州の危機感の違いでしょうか。

ロンドンのホテルの近くにはアメリカ大使館があり，その隣の公園にあるルーズベルト元大統領像に多くの人が献花していました。早朝，私も団を代表してアメリカ国民にお悔やみの言葉を記帳しました。

アメリカ・ラスベガスの総会は平成15年3月に開催されました。

当時，建設業を取り巻く経済環境の見通しも明るさを取り戻せないまま，さらに3月末から4月にかけての年度をまたぐ日程でもあり，日本からの視察団を結成する事は困難という覚悟はできていました。それでも，日本からの発表論文は9編と多く，なんとか当初予定していた30名の視察団を確保する事ができました。しかし，イラクのフセイン政権が隣国クウェートの油田獲得のため侵略したことに発して，米・英国を主体とする連合国とイラクが開戦したため，日本の企業の多くが海外渡航自粛令を発令しました。出発直前の参加キャンセルが相次ぎ，結果的には10人程度の視察団で参加することになりました。しかし総会は例年以上に賑やかで，連合国に属する国，英国など大勢の委員が参加していました。日本人だけが多く登録をキャンセルしたこともあり，どうしたのかとかえって不思議がられるような次第でした。

恩恵は往復のJAL便でした。定員の10％くらいの搭乗率で，キャビンアテンダントのサービスもよく飲み放題，食べ放題，和田事務局長は二日酔いを超え三日酔いとなり，よくその状況で不参加者の発表の代読をしたと評価されました。

また，ロサンゼルスの日航ホテルもガラガラ，市内のリトル・トーキョーも人影がまばらでした。帰りの便では，当時人気だった焼酎の森伊蔵（日航便のみ販売，一人一本限定）を9本も購入しました。

国力としての情報力の差か，個人の危機感の差かわかりませんが，日本人が一致して行動することの不思議さは持たれたと思いました。私は日本人として，なんとか参加しなくてはという意識で行動しましたが，まだISなどテロ組織が未成熟であり，その面で幸運だったかもしれません。

5. おわりに

国際会議を通じて多くの友人，特にアジアの方々と出会い，交流を深め，日本の非開削技術の促進に少しでも貢献できたことに対し，関係者に感謝する次第です。平成26年には，スペインのマドリードでISTTより功労賞をいただきました。当時のISTT会長はアジア人二人目となる香港のデレク・チョイ氏で，彼から賞状と感謝の言葉をいただいたことは，同じアジア人として感慨深いものでした。

終わりになりますが，非開削技術の将来は洋々です。今後，ISTTの総会が日本で開催され，多くのアジア人が参加されることを願ってやみません。